

阪神・淡路大震災を乗り越えて

神戸商船大学白鷗寮自治会長 有 田 俊 晃
(商船システム学課程・機関学コース第4学年)

平成7年1月16日、地震前夜の僕は、友人と三宮のある居酒屋にいた。僕たちは今の平和な何事もなく過ぎていく日々を、また、間近かに迫る就職や今後の白鷗寮について、時間の経つのも忘れて語っていた。その後、意気揚々と僕と友人は互いに自室に戻り、深い眠りについた。その時、既に時計の針は午前3時をまわっていた。

5時46分、大きな地鳴りを夢見心地で聞いていた直後の大地震に、僕は身動き一つできず只々そのすさまじさに茫然としていた。揺れを感じてからどれほど経ったかわからない。いつまで続くんだろうかと思ったその時、ラジカセが頭に落ちてきた。「もう、おわりだ!!」と思ったが、揺れはおさまった。そして、既に起きて廊下で話をしている学生の声に気がつき、僕も廊下へ出てみた。

足もととはふらついていて、意識ははっきりとしていた僕は、寮内の状況を見るため外に出た。しかし、外はまだ真っ暗で何も見えず、また、寮内のどの場所にも電気がついていなかった。微かな明かりで寮棟の倒壊がないことを確認し、ほっとしてその周辺を見ると、闇の中に赤々と燃え上がる炎が見えた。あらためて非常事態に気づき、徐々に集まってきた寮自治会役員に「寮生総員中庭集合」の点呼の指示を出した。幸いその時寮内にいた寮生には被害がなく、全員無事だった。しかし、寮外にアルバイトに出ている寮生の安否が分からず、心配だった。

寮生の安全を確認した後、余震のためその場で待機していたが、停電のために情報源であるテレビやラジオが使用できなかったのも、状況が全く分からなかった。そこで、車のラジオを聞くことにして、車を持っている寮生に頼んで車を中庭に入れてもらった。その時の情報では、震源地は淡路沖、震度は6としか分からず、何の役にも立たなかった。

少し明るくなり、互いの顔がはっきりと分かるようになってきたころ、「一時解散、居室待機」として、周辺の状況を見るために寮外に出た。しかし、一歩踏み出したところで僕の足は止まった。すぐ側の三和市场が倒壊していたのである。その悲惨な状況には、僕は言葉もなく、ただ見ていることしかできなかった。すると市場の方から「人がまだ倒壊家屋に埋まっている。」という声が聞こえてきた。既に見に来ていた数人の寝間着姿の寮生が救助に行こうとしていたのを見た僕は、その寮生を引き止め、作業服を着用し、安全靴を履き、トーチランプを持ち、防寒対策をしてから救助に行くように指示をした。その後、自分も着替え、救助に向かった。三和市场の建物は倒壊して道にはみ出していた。また、中央のアーケ

ードは下に落ちており、正面から入り込むことは不可能だった。しかも、辺りはガス臭く、“もし誰かがたばこに火をつけたら”と思うと怖くて仕方がなかった。既に中に入り込んで救助活動を開始していた寮生とともに作業を行ったが、何の道具もない状態で作業を行っていたので想像以上に作業は難行した。そこで、僕は2階建ての家の屋根に上り、倒壊していない家から何か道具を借りてくるよう頼んだ。借りた物の中には、ノコギリ、ハンマー、バールなどがあった。屋根に上った際に辺りを見まわしてみると、三和市場だけでなく、周辺一帯の木造家屋は大半が倒壊しており、地震の大きさ、被害の大きさをまざまざと見せつけられた。

数時間救助活動を行った僕は、一旦寮に戻り、避難者に寮内に入ってもらうための準備を行うとともに、全てに対応するための本部を学生当直室に設置した。その後、三和市場と寮とを何回か往復していると、ある寮外通学生の救助にあたっていた寮生から、同期の友人の死を告げられた。まさかそんなことはないと心の中で思いながら、僕は本部にて、寮生への指示、電話の取り次ぎ、大学との連絡、避難者の対応を行っていると、その友人は毛布にくるまれて寮へやってきた。言葉は出ず、ただ涙だけが出てきた。彼を倒壊家屋から引き出した寮生に詳しい状況を聞いたとき、いたたまれない気持ちでいっぱいになった。その後も次々と悲報が入り、僕の頭はどうにかなってしまいそうになった。

救助活動は、範囲半径約2キロメートル、夕方まで続けられたが、寮生の安全を考え、日没と同時に帰寮するように指示を出した。そして、その救助活動に際し、報告のあっただけでも100名以上の尊い命を救助することに成功したことがわかった。

日没後、本部である学生当直室は20名ほどの寮生で埋めつくされていた。みんな余震の恐怖で眠れないのである。余震がくるたびに寮務委員は巡検し、報告に来た。ラジオは1時間おきに、地震によって奪われた尊い命がどんどん増えていくのを告げる。みんなは「こんなでまいったらあかん！何かおもしろい話でもしよや。」と励まし合った。夜がこんなに長いものだとは思わなかった。

2日目、交通機関はいまだマヒしたままだったが、寮生には避難帰省をしてもらった。食料がなかったのである。寮生は、保存食や水を避難してきた人たちにあげてくれと我々に手渡してくれて帰っていった。残った寮生は40名程度、避難者は400名以上いた。我々はすぐに避難所としての態勢を整え、今後に備えた。

3日目、意志統一をし、運命共同体として頑張ることだけが自分を支えてくれる唯一の要素だった。その中で、普段から寮生活を通して培ってきたものを応用し、学生側には物資を管理・配給する班、消毒液・うがい液を担当する班、仮設トイレを管理する班などを組織し、また、住民側には各ブロックごとの代表者を選んでもらい、住民・学生共同の自治組織を

作り、代表者会議を開始した。

一方で、未だ行方不明だった友人が倒壊したアパートの自室で亡くなっていたのを、自衛隊とともに作業を行っていた寮生が引き出した。みんなの感覚がマヒした状態のなかで、救助作業にあたっていた寮生は、ああ、遭えてよかったと思ったそうだ。

その後、大学が再開するまでの間、ボランティア活動を行ったが、本当にいろいろなことがあった。当初、物資が届かないときには、住民のみなさんと一丸になって、リヤカーを引っ張って余震の続く中、区役所へ走った。今までの常識を完全にくつがえすことばかりであった。

今回、何故このように寮生が一つとなり、自ら危険をかえりみず、救助・救援活動をすることができたのかはわからない。しかし、この学生生活を振り返ると、船乗りのチームワークや船上生活は、24時間緊急事態であるといったようなシーマンシップの教育、更には、日頃から近隣の人々との交流があったことが今回のことに起因しているんだと僕は思う。

震災から約8か月経った今、当初は白鷗寮に約460人、本部キャンパスの体育館、武道館にいた約600人の避難者も、8月27日までには全員退去され、被災・損壊して不自由であった白鷗寮や本部キャンパスの全面復旧工事もほぼ完了し、ようやく正常な寮生活や学園生活ができるようになったが、まだ、グラウンドや繋船池の護岸の復旧工事・海技実習センターの建設工事は、これから2年程かかると聞いている。

しかし、街は徐々に賑わいを取り戻し、復興の兆しが見えてきたが、この大震災を過去のことにするわけにはいかない。その傷跡は僕の心の中に深く、大きく根強く残っている。見慣れた景色が失われた。友人の死があった。さまざまな記憶がいまだに鮮明に脳裏に浮かぶ。そして、この大震災を乗り越え、更なる前進をしていきたい。

白鷗寮自治会の救助活動に対する表彰及び記念事項

- ・平成7年3月 2日 日立グループ「親切会」表彰
- ・ " 5月27日 自治大臣表彰
- ・ " 7月24日 神戸商船大学長表彰
- ・ " 9月 1日 防災功労者内閣総理大臣表彰
- ・ " 9月 1日 文部大臣から「記念品」贈呈
- ・ " 9月14日 寮庭に記念植樹、記念碑設置

生命の尊さを 身をもって知る

神戸商船大生の手記

震災直後に救出へ向かう



●恵美 裕
商船システム学課程
(機関学コース) 2年

その後、中庭で寮生の無事を確認した後、寮西側の三和市场へ向かいました。

最初は、一階が完全に崩れている家があり、その家の二階に、おばさんがいたため、その方を安全な場所へと導く事から救助作業が始まりました。

するとその近所の家の人が、向こうの一階におじいさんとおばさんがいる、と言う声を聞き、その現場のすぐ近くへ行きましたが、全く手が出せませんでした。

そのため、反対側の方から救助に行こうと思い、他人の家の庭を通り抜け、反対側へと向かいました。その途中に脱出できずに家の二階部分に閉じ込められていた一家を安全な場所へ導き、一階で閉じ込められているという老夫婦のところへ向かいました。

その後、外へ避難した時の周りの光景にも驚きました。白っぽく霧がかかったようになっていました。近所でも倒壊した建物が多くあったので、その埃で白く霧がかかっていたようです。

大声で、おじいさん、おばあさん、と呼びかけ、返事のする所へと向かい、脱出でき(ように)瓦礫を取り除き、お

ばあさんを脱出させました。
しかし、中に残っているおじいさんは耳が不自由だからといって、その場を離れたがらなかったのを、何とか説得して安全な所へ避難してもらいました。

その後、寮へ戻り、対策本部を設置しました。僕自身、寮自治会の役員をしており、寮内で待機して、避難して来られる方々に場所を提供したり、毛布を渡してあげたり等していました。

当日は、電話も混線していたり病院自体が倒壊していたりしたため、救急車も呼べず、また、重傷を負った人を受け入れてくれるのかどうかもわからず、学生のマイカーを使い、重傷者等を運んでいました。

そうしているうちに、家の一階にま

“人を助け出せた”と感動

一月十七日五時四十六分 その悲惨な出来事は起こりました。



●田中 康仁
輸送情報システム
工学課程 2年

だ一人救出されていない人がいるという通報があり、そこへ向かいました。その家の一階部分が崩れ、二階部分がスライドしていたため階段と家のはりにその方は押さえつけられていました。

チェーンソーやジャッキを使い最善を尽くしましたが、残念な結果となっていました。

その作業中僕の父と年の違わない男の人が、埋っている老婦人に対して、「おかあちゃん、学生がもうすぐ救出してくれるから、もうすこしがマンしてな、苦しいやろ」と声をかけられていた様子が、未だに頭に残っています。この様な事が二度と無ければと思います。

当時、僕は寮のボンクで寝ていました。そして突然起こったその出来事にただおびえていました。最初は寮にトラックが衝突したのかと思いました。しかし、その後、数秒の揺れで初めて地震だと気付きました。僕にはとても長く感じた地震の揺れがおさまった後、部屋の外に飛び出しました。

隣室の友人、そして同じ階の寮生も同じように、あ然とした表情で廊下へ飛び出して来ました。僕は友人とすぐ

さま防災扉を開いて外の風景を見ました。外はまだ暗く、砂煙があがっていました。

その様子でただごとではないなと思ったが、築三十年を超す寮がもっているのさほどではないと思ひ、とりあえず同じ階の寮生の安否を確認し、中庭に集合してもらうよう指示して、自分も中庭に行きました。

外はまだ暗く、北と西の空が赤く染まっているのがわかりました。周りが明かるくなるにつれて、だんだんと事の重大さがわかってきました。人の走り回る姿、そして初めて倒壊した家を見た時、辺りが大打撃を受け、とても大変だと気付きました。

その後すぐにその家に向かいました。幸いその家の住人は皆無事で外に出ていました。しかし、その家のすぐ西にいつも見えている三和市场を見ると、看板はいつもの位置には無く、通路もふさがってしまっていて、一体どうしたのかと走り寄ってみると、三和市场のほとんどの家が倒壊して、中央の通路に倒れていました。

そこではすでに数人の商船大生が救助活動を行っていました。僕はすぐさま寮に戻りスコップやヘルメットを取ってきてその場にいる寮生にそれらを渡し、一緒に救助活動を始めました。

僕には、どこに、どういう状態で人が埋まっているのかわからなかったの

で、最初から救助活動を行っていた先輩や地元のおじさんと一緒に行動をとりました。

その家は、一階が半分の高さぐらいまでつぶされてしまっていて、家族の人に聞くと一階のトイレにまだいると言っていたので、初め二階から一階に行こうと試みました。

しかし、それは無理なのでトイレの

不眠不休で動き回る



●萩田耕二郎

商船システム学課程
(機関学コース) 2年

その時、私は友人と二人で横断歩道を渡るため信号待ちをしていました。場所は四三号線です。激しい揺れに絶えられず頭を抱えてしゃがみ込み、揺れが収まるのを待ちました。その間にとっても大きな音がしました。

その時は何も分からなかったのですが、後でテレビを見てみると阪神高速道路が落ちた音だと分かりました。

取り敢えず寮に帰ろうという事になり、歩き出しましたが、倒れた電柱や

すぐ近くのコンクリートちゃん、シマーで砕いて、瓦礫を取り除いていくと、その方の手が見えたので、声をかけましたが返事は返ってきませんでした。人の死に直面したのは初めてでした。その後も救助活動を行い、人を助け出したときは本当に感動しました。

今回の震災で改めて、人の命、生きていることの大切さを知らされました。ひざの高さまで落ちていた電線に足を取られそうになり、灯りのない道を慎重に歩きました。

寮に着くと中庭には寮生が集まりザワザワしていましたが、みんなの無事を確認すると自然と倒壊した市場の方へ足が向かいました。

信じられないような光景が目に入り、足がすくみましたが、実際の前に助けを求めている人がいると、それどころではなく、友人何名かと救助活動を行いました。

日も暮れ救助活動を中断し、寮へ帰ると、数百名の被災された方が避難しており、夜は援助物資の搬入や余震対策のため二日程は文字通り不眠不休で動き回りました。

この白鷗寮の食堂が避難所のようになっているのは、便所の事や、水、食料の事等、いろんな事をやり、二ヵ月経っ

た今では、あまりよく覚えていません、作業の内容も定常化し、余震も少なくなり、やっと自分の身辺を考える余裕ができ、辺りを見ると、あまりにも変わってしまった光景に切なくなり、この災害の大きさを実感しました。

辺りを歩き回って、当時自分が駆け回った場所へ来ると、断片的にですがその時の様子が思い出されます。

倒壊した市場、ここではガスのにおいが充満し、非常に恐かったです。昼過ぎに向かった友人の下宿では、コタツにはさまれて動けない男性を救助しようと思ひ、道具を探しまわったりもしました。交番や消防署にも応援を求めに行きましたが中には誰もおらず、伝言を残して去ったりもしました。

その日の夕方、おばさんを救出してあげた家はもう更地になっています。赤十字の救急車に乗って道案内をした時は非常にもどかしい思いをしました。回り道をし、やつのことで患者を病院に運んだのに水が無かったり、薬品が無かったりして他の病院へまた運んだりもしました。

二ヵ月以上経った今、ものすごい勢いで復興していますが、まだまだ問題は山積みだと思っています。

全てが以前の様に戻るにはかなり時間がかかるとは思いますが、是非とも以前の様な生活ができるよう、問題を解決し、がんばっていかうと思ひます。



神戸商船大学
学生部長
杉田英昭殿

副部長 島 村 康 雄

1995年 3月29日

川崎汽船株式会社
船舶部
〒105 東京都港区西新橋1丁目2番9号(日比谷セントラルビル)
電話(03)3595-5768 FAX(03)3595-6112

川崎汽船株式会社
船舶部長
永 戸 圭 介



謹呈

陽ざしもやわらかく、すっかり春めいてまいりました。

この度の阪神大震災におきまして甚大な被害を受けられました貴学及び貴学職員並びに学生の皆様へ、大変遅くなりましたが謹んでお見舞い申し上げますと共に、お亡くなりになられた関係者の方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。又、大きな被害に遭われたにもかかわらず、本日無事卒業式を挙行された事お慶び申し上げますと共に、一日も早く完全復旧されますことを我々川崎汽船に所属します同窓生一同心から祈っております。

さて地震発生後、貴学におかれましては多数の被災者を受け入れられ、支援を続けられました事、度々マスコミで報じられ、全国の視聴者の知る所となりましたが、とりわけ我々の耳目を引きつけたのは、学生寮「白鷗寮」の寮生約 250人が大震災当日身の危険もかえりみず大きな被害を受けた近くの被災地に繰り出し、崩れたガレキの中から 100人以上の住民を救出、病院へ運び込み人命救助の活動をしていたという過日の一般紙の報道であります。

海上を労働の場とします我々海技者にとりまして、非常時の際の最も大切な事は、早期に的確な組織的活動を迅速に行うことではありますが、今回の寮生の活躍は、海運界と深く係わりのあります海の大学の若者達、とりわけ我々の後輩諸君による見事な人道的行為であるだけに、非常に印象深く記事を読ませて頂いたと同時に、我々同窓生の一人一人の心に深い感銘を与えてくれました。

円高で呻吟しております海運界だけに、最近余り明るいニュースは有りませんが、この様な時機に、全国紙で懐かしい“神戸商船大学”という大きな活字と共に寮生の活躍を報じる記事を目のあたりにしました時には目頭が熱くなる思いがしました。又21世紀を背負って立つ若者達が確実に育っているんだという思いを強くすると同時にこの記事を読んだ我々社内の同窓生の中よりこの誇るべき後輩諸君を慰労、激励しようという声が当然の如く沸き上がりカンパを募ることとなりました。ここに甚だ些少では有りますが、カンパの結集をお送り致しますので、何かのお役に立てて頂ける様お願い申し上げます。

最後になりましたが、貴学の益々の御発展と学生の皆様の今後の一層の活躍をお祈り致します。

謹白

今日のノート

手元にあるいくつかの英語辞書を繰っても出ていないのだが「CAPTAIN LAST」という言葉を聞いたことがある。船が遭難などに遭った時、乗客、乗組員が脱出した後、最後に船を離れるのが船長という意味で、船長の責任の重さやシーマンシップを表す。転じて、組織のトップ、リーダーたる者こうあるべし、という教訓だったような記憶だ。

人が一組になって、救助活動が続け、がれきの下から百人の住民を助け出した。今でも住民から感謝の言葉が寄せられている。

極度の混乱、緊張状態の中で組織的な救助活動ができたのは、日ごろの実習などで危機管理能力を養い、シーマンシップを自然に身

震災では学生らの行動もそうだが、関西空港の開港など「空」が華やかに注目を浴びている一方、影が薄かった「海」の役割が見直された。寸断された住民の足になり、生活・救援物資、復興資材を運んだ。船が避難所にもなった。来年から七月二十日が「海の日」として、十四番目の国民の祝日になる。祝日法の改正まで、日にちの根拠に疑問があるなどと異論もあったが、今国会で成立した。日本はこれから島国であることに変わりない。海を考え、シーマンシップをたてる日になればいい。商船大の学生にはその資格が十分あると言えるだろう。

海の日

阪神大震災当日、神戸商船大学の学生寮「白鷗寮」の二百五十人は、自治会長の号令のもと、安全靴、軍手に身を固めて被災地に飛び出した。半日にわたって二、三

に付けていたからだろう。

とは言っても、大学でも関係者十二人が犠牲になった。住民を救えた反面、死んだ友人を背負うという過酷な体験をした学生もいた。先日の慰霊祭では海への誓いを新たにすることがだろう。

織田 峰彦

織田 峰彦

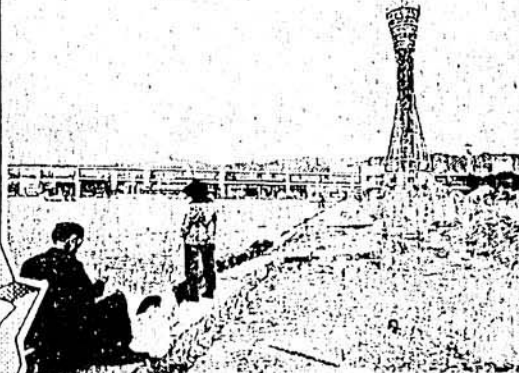
織田 峰彦

織田 峰彦

織田 峰彦

織田 峰彦

田中康夫のKOBE震災ボランティア



◆鉄腕アトム◆初の国産テレビアニメで、1963年(昭和38年)1月1日午後6時15分から、フジテレビ系3局ネットでスタートした。66年12月31日には、震害視聴率40・7%を記録。アニメ史上の記録をつけた。

商船大生陸難恐れず冷静な救出活動

東灘区木山南町にある神戸商船大学の学生寮で自治会長を務めていた三回生の石田俊晃君は、机の上から落ちてきたうしろさが頭に当たって目が覚めた。昭和三十一年に作られた古い寮の建物を確認する義務が自分にはあ

る、とガリと敷地を一周した。幸い建物自体に被害はなかったが、少し離れた阪神津屋敷前の商店街や国道二号線沿いの木山町の方角から火の手が燃つて上が

り、とガリと敷地を一周した。幸い建物自体に被害はなかったが、少し離れた阪神津屋敷前の商店街や国道二号線沿いの木山町の方角から火の手が燃つて上が

っているのを確認する。これは非常事態だ。安否確認をしなくては、と中庭に寮生を集めて全員の無事を確認した。まだ日も上

◆外国領事館 大震災が貿易都市としての歴史も消えてしまっている。1874年(明治7)に設立した神戸ドイツ領事館(神戸市中央区)が大阪に移転する事が決ま

マイクで伝えた。「安全靴を履いて、ヘルメットをかぶれ。二次災害に気を付けろ。一人では絶対に行動するな」と。

が、約り人もいる神戸ポートタワー近くの護岸は崩れたままだが、約り人もいる

安全靴とヘルメットがこんな時に役立つなんて、と思

は、非常ベルが各所でジリジリ鳴っているのに、パトカーの音も消防車の音も救急車の音も全然聞こえて来

活用し道路は魚裂や段差だらけだ。助け出し、人々を医療機関に運ぶのに車は通さ